

## 漢字はむずかしくない

私は一年間に文部省の目標の約十倍を習得させた

石井 勲

(大東文化大学教授・石井教育研究所所長)

### 一年生から漢字

遠 足

歩け、歩け、

元気に 歩け。

右の文は、昨年、私の指導する一年生が、4月、国語の学習でぶつかった最初の文です。

私は、この年の一年生の使用する教科書を、使用するに先立って、次の方針によってこれを訂正させました。それは、「教科書に使われている言葉で、当用漢字で書き表わすことのできる言葉は、すべて(一つの例外もなく)当用漢字に書き改める」ということです。つまり右の文は、

えんそく

あるけ、あるけ、

げんきに あるけ。

とあったのを書き改めたものです。

このような学習方法によって、私の指導する一年生は、中学生でも学習しない当用漢字(御承知だと思いますが、中学を卒業するまでに

習得すべき漢字が、いわゆる教育漢字の881字であって、他の多くの当用漢字は高校以後に学習されるのです)を使って書かれている文を読ませられ、学習させられたわけです。

これだけのお話では、おそらく皆さんは、「何という無謀な、何という無茶な指導をすることだろう」と思われることでしょう。しかし、事實は、私の指導する一年生は、これを少しも困難だとも、大変な学習だとも思わずに学習を続けて行なったのです。そして、一年を終わる頃には、後に述べますように、ほとんどの子どもが、文部省の指導要領が一年間に習得すべき目標としている漢字の十倍もの数量に当る漢字を習得してしまったのです。

この年の2月、私の一年生に対して行なっている授業を見に来られた大岡昇平氏が、3月9日の朝日新聞で、「入学後二カ月で百字、漢字をばりばり読む小学一年生」という見出しで、「それはまったく感動的な光景であった」と評して下さるまでに、私の指導する一年生は、すばらしい読書力を身につけたのです。

### 漢字教育の新方式

私は、小学校における実験的指導の結果から、わが国が、明治以来、行なっている漢字指導に根本的な誤りがあることを発見し、漢字教育に次の二つの基本原則を立てました。

〔その1〕社会で、一般に漢字を用いて表記している言葉は、相手がたとい小学校の一年生であっても、最初から漢字で表記して提出しなくてはならない。初めはかな書き表記で学習させ、それに習熟させてから漢字書きに移る、という今までのやり方は、絶対に止めなければならない。

〔その2〕社会科用語は社会科で、理・数科用語は理・数科で提出し、指導すべきである。今までの、「国語の教科書に提出され、指導されていない漢字は、他教科では提出すべきではない」という考え方は、絶対に改めなければならない。

この2つの基本原則に従って学習を進めていくわけですが、ここで注意しなければならないことは、提出した漢字の指導についてです。

漢字の指導は、提出した最初の機会に必ず行なうべきものであると、固く考えないことが必要です。まして、提出した漢字を、その時間のうちに習得させよう、などと考えることは、今までの漢字指導では当然のこのように考えられていますが、これは行き過ぎです。漢字の読み書き学習は、自転車の練習のように考えるべきだと私は思っています。

ただ一度の学習で習得するのは、優秀児でも困難ですが、20回も30回も学習の機会を与えたら、どんな子どもでも習得できるでしょう。私は、どんなに能力の低い子でも自然に覚えられるように、20回でも30回でも練習する機会を与えて、習得を気長に待つことにしています。私が漢字指導に成功しているのは実にこのためです。

「言う」という漢字は、文部省の学年配当表によれば、四年生になっています。それまでは、「いう」という表記で学習しているのです。恐らくそのためだと思いますが、漢字指導の実験学校の実態調査によれば、六年生で、この字が54パーセントの子どもにしか読めていないのです。

これは、「いう」という言葉が、「いう」というかな表記と結びつくように三年何か月という長い期間にわたって学習して来たので、四年生に

なって、「言う」という新しい表記を学習したところで、習得しにくいからではないでしょうか。「いう」という言葉の使われる機会は、四年生以後よりも、一、二年生の方が、比較にならぬほど、はるかに多いのです。私の指導する一年生は、一年生のなかばで、80パーセント以上の子どもが習得してしまいました。

六年生でも54パーセントの習得率の文字が、一年生でも80パーセント以上の習得率を収められる理由は、一体、何だと考えるべきでしょうか。勿論、一年生の方が能力があるわけではありません。「いう」という言葉を最初から「言う」という表記と結びつけて学習させたことと、その後何十回となく使われた「言う」という言葉と文字の使用により、反復して学習が行なわれ、自然と、苦勞することなく覚えられたためだと思います。

私たちは、人の顔を見ますと、「すぐ　さんだな」と、反射的にその人を見分けてしまいます。目、口、鼻、ひたい、あご、およびこれらの配置の具合など、顔のあらゆる細部にわたって観察して、それで「　さんだな」と認知するのでは決してありません。あるいは目のあたりを、あるいは口のあたりを、あるいは顔の一部をどこともなく、視線をさっと一走り走らせるだけで、その人が　さんであることを認知しているのです。

そうして、その後長いこと交際している間に、特別の注意を払わなくても、その人について、いろいろな細かい点までを知るようになるのです。

私は、そのようなつもりで、漢字の指導にも、最初から深い、正確な認識を持つことを子どもたちに求めません。

「右」を学習したばかりの子どもが「石」と区別がつかなくなったり、ま

た、「鳥」を学習したばかりの子どもが「鳥」という字を見て「とり」と読んだりしても、それで第一段階として成功だと私は思っています。

書き出しの所で例文にあげた「元気に」という言葉を学習してから何日か後に、子どもたちは「天気」という言葉を学習させられたのですが、多くの子どもたちはこの字をも「げんき」と読みました。私はその時、そう読んだ子どもたちを、「よく読めたね」とまずほめてやりました。そのあとで、「だけどね。よくみてごらん。この字は、『げんき』という字によく似ているけれど、どこか少し違うところがあるんだよ」と言ったのです。

それから少し考えさせておいて、今度は、「元気」という字と、「天気」という字とを黒板に並べて書いて、その違いを十分に観察させ、「天気」は「てんき」と読む字であることを指導しました。

先の「言う」という字の場合にしても、私は、この言葉を使う必要のある一年生の最初からこの表記を使いにはしますが、六年生を終わるまでに(これは極端な言い方ですが)習得してくれればよいと思っていますので、なかなか子どもが覚えてくれなくても、少しも心配しません。そんなに早く習得しなければならぬ理由など全然ないから考えるからです。ただ、私がそのようなつもりでいるのですが、私の漢字の提出の仕方、私の指導法によれば、六年まで待たないでも、それどころか、一年生の半分もたたないうちに、ほとんどの子どもが、これを習得してしまうのです。

私の指導法を初めて耳にした人や、私の指導する一年生が使っている教科書(後述の例文「お使い」参照)を見た人は、必ず、「一年生にずいぶん大変な学習をさせるんですね」と言います。いかにも無理な学習をさせていると言わんばかりです。なるほど、うわべだけはとて

もむずかしそうに見えますが、しかし実際には、私の指導する一年生ほど、ゆったりとした足どりの学習をしている一年生はない、と私は思っています。

### 実験の動機と結果

私はもう十数年も前から、明治の教育制度の発足以来現在に至る「漢字指導のあり方」そのものに疑問をいただいていた。それは、漢字を最初は提出しないで、言葉をかな書きして提出し、それに習熟させてから漢字を提出する、というやり方に対する疑問です。

私は当時、母校の高等学校に勤めていて、国文法と英文法とを担当していました。私は文法ばかりでなく、国語を外国語と比較研究することに特別の興味を持っていましたので、わが国だけが、表記指導に、子ども用の特別の表記法、たとえば「学校」という言葉を、最初は「学校」という表記をしないで、「がっこう」という別の表記を使用していることに疑問をいただいたわけです。

どこの国でも、表記は、一つの言葉に対して一つの表記しかなく、従って、表記の指導は、最初から最後まで終始一貫した表記指導が行なわれています。幼児用とか小学生用とかいう表記は、全くその存在を許されていません。それが結局、表記の機能をも、学習の効果をも高めることになるのです。一体、表記法というものは、たといどんなにむずかしいものであろうとも、いやむずかしければむずかしいほど、かえって早くから、正しい表記の仕方を指導し、それに習熟させる必要があるのではないかと、そういう理屈も成り立つのではないのでしょうか。とにかく私はそう考えたのです。

また、漢字の「一」「二」という表記と、英語の「one」「two」(発音は w

n, tu:)、また漢字の「山」「川」という表記と、英語の「mountain (mauntin)」「river (rivə)」という表記をくらべて見る時、わが国の漢字はむずかしくて、英語は文字が少ないので表記の学習がやさしい、と言えるかどうか。

また、今の一年生の教科書では、「やま」「かわ」と表記されているが、それは「山」や「川」よりも、ほんとにやさしく、学習しやすいものなのであろうか。こんな疑問が私にはあったのです。

ちょうどその頃、かなを一文字も読めない私の長男(まだ四歳になっていませんでした)が漢字を読むという事実を発見したのです。抽象的思考の産物である表音文字よりも、子どもがよく認知している実在の事物と一对一の関係で対応する、具象的な漢字の方が、幼い子どもたちにとって理解しやすいことを、理論だけでなく事実として自分の目で確認することができたのです。

昭和26年、私の住んでいた東京都下の八王子市に教育委員会が設置され、私は、その指導室の主事に任命されました。ここで私は、待望の小学校教育を実際に見る機会に恵まれたわけです。

しかし、小学校の授業を見せてもらっているうちに、自分でやってみたいという気持も湧き、また、小学校教師の経験もない者が、経験の深い教師に指導助言を与えるという矛盾をも感じて、長男が小学校に入学するのを機会に、自分も一年生の指導から勉強してみようと決心し、昭和28年、小学校に勤務することに致しました。もちろんその前年あたりから、綿密な計画を立てて、今までの表記についての疑問を、自らの手で解決する実験を行なう手はずをととのえていたのです。

さて、昭和28年から3年にわたって新方式による漢字指導を実施

し、続いて、昭和31年から2か年にわたって、一般に行なわれている普通指導を実施し、両者の結果を比較検討しました。すると、この両者に驚くほどの優劣があることがわかりました。これについて詳細に述べる余裕がありませんので、一、二重要な点だけを指摘したいと思います。(これについては拙著『私の漢字教室』を御覧頂ければ幸いです)

「かなを学んでから漢字へ」の方式には、三つの欠陥があります。

第一は、漢字の誤った使い方が多いことです。これには「火と(人)が木(来)ました」という種類のものと、「月き、川わ、雨め」という種類のものとあります。この誤りはばかになりません。矯正に意外なほど時間を取られます。しかし、新方式に従う限り、このような誤りを犯す余地がありません。だから、学習効果が高いのです。

第二は、学習した漢字が、作文やノートを取るに当って、なかなか使用されない、ということです。つまり、テストすれば言けるのだが、それが作文に使用されないというわけです。これは、かな書きに習熟させてから漢字に移るということをしている以上、漢字を学習しても先に学習したかなの方が使用しやすいのが当然です。しかし、これも新方式に従う限り、そういう心配は全く起らなくなります。

第三は、言葉の学習効果の問題です。かながやさしいというのは、発音がやさしいというだけであって、文は音読できただけでは、何にもなりません。たとえば「さくぶん」という言葉にしても、発音するだけなら、これはやさしいことです。しかし、読む目的は発音することではなくて、意味を汲み取ることにあります。その点、「作文」という表記で指導しますと、発音できなくても、「文を作る」ことだと、一年生が独力で解きます。「さくぶん」という表記では、「作文」の2倍も3倍もの時間

を費しても、その言葉の正しい意味を理解させることはできないでしょう。二つのやり方を自分で試みた私は、新方式による指導が、かなによる指導よりはるかに学習効果の高いことを、確信をもって断言できるようになったのです。

### 一年生がばりばり読んだ

さて、去年の4月、「歩け、歩け、元気に歩け。」という文から出発した一年生は、今は二年生になりました。私は、ひかえめに言って、よそのどこの学校の三年生や四年生でも、読む力においては、私の二年生には及ばないだろうと思っています。少なくとも、私の二年生の使っている教科書は、よその学校の子どもでは五年生や六年生でも、私の指導する二年生ほど読むことはできないと断言してはばかりません。

昨年、一学期の終りに、一学期間の学習させた漢字のうち139字(実は140字提出したのですが、一字重複していましたので一字へりました)を選んでテストしてみましたところ、全部の漢字が読めた子が3人いて、学級の平均習得字数は112字強でした。文部省が、一年間に、一年生の習得すべき漢字の字数は約30字としていますから、これでは一年分の三倍半以上の漢字を、逆に三分の一の期間で習得してしまったということになります。つまり、文部省の目標の約十倍の学習に成功したことになります。

なおここに、参考までに、大岡昇平氏にお見せした授業に使用した教材をお見せしたいと思います。

### お 使 い

「竹男さん、肉屋さんへ行って来てね。」と、台所からお母さんが言いました。竹男さんは「はい。」と返事をしました。けれども、本から目を離しません。

「鳥のひき肉を五十円買って来て頂戴。」竹男さんはやっと立ち上がりました。そして、お母さんから渡された百円札をポケットに入れると、買物袋を持って急いで出かけて行きました。米屋さんの前で進さんに呼び止められました。「竹男さん、どこへ行くの。」「肉屋さんへお使いに。」「何だ、お使いか。走っているから、僕はどうしたのかと思ったよ。」「だって早く帰って、読みかけの本の続きを読みたいんだもの。さようなら。」竹男さんはまた駆け出して行きました。

肉屋の店先にはハムやソーセージや卵が並んでいました。「おじさん、五十円下さい。」竹男さんは元気に言いました。

「はい、はい。五十円、何を上げましょうか。」「ええと、何をかうんだっけ。ええと、牛肉ではないし、ハムだったかな。何だったかなあ。」いくら考えても思い出せません。竹男さんはきまりが悪くなりました。

「家へ帰ってもう一度聞いて来ます。」竹男さんはあわてて家へ駆けもどりました。

この教材は、よその学校で使用している国語教科書の二年の後期用書から取ったものです。ただし、「、」をつけた字だけが漢字で、あとの漢字はすべてかな書きされていたものを、私が漢字に改めたものです。

「いたいけな一年生が、ばりばりと読んだ」と大岡氏が朝日新聞で評して下さいましたように、私の指導する一年生は、この文をばりばりと読んだのですが、しかしそれは練習してあった文を読ませたから、ばりばり読めたのでは決してありません。この教材は、その前日、子どもたちを下校させた後、印刷したものであり、大岡氏ほか見学の方々が教室に来られてから子どもたちに初めて配布し、下読みもさせないで、いきなり指名して読ませたのです。

この程度の漢字混り文でしたら、いつでも一度も目を通させないで読ませても、読みのじょうずな子どもたちは、ばりばりと読みます。

### かなは決してやさしくない

昨年、私の学校では、一年生が二組あって、一組は私が、一組は菊池先生が指導しました。菊池先生は、今までこのような指導をした経験がありませんので、つい今までの習慣から、漢字で書くべき言葉をかなで書いてしまうことがあるのだそうです。

すると、そういう時に限って、「先生、それは何ていうことなの」という質問が多いそうです。それで先生は、はっと気が付いて漢字に書き改めると、「何だ、か」と言って、すぐ了解してしまうという話です。私たち言葉については相当熟達しているつもりの者でも、かな文は読みにくく、読んでみて首をかしげることが多いものです。ところが、これを漢字で表記するとすぐ了解できることが多いものです。

これも菊池先生のお話ですが、一年生の終わりに近いある日、普通の一年生の教科書を読ませたところ、今までの漢字の多い文とは打って違って、これはしどろもどろの拾い読みだったそうです。そこで、そのかな書き文を全員に読ませ、その上で、かな書き文と漢字混り文

と、どちらが読みやすいかをたずねてみたそうです。すると、「漢字の多い文の方が読みにくい」と答えた子どもは3人しかいなかったそうです。この組には、その2、3か月前に転校して来たばかりの子どももいたのですが、その子まで「漢字の多い文の方が読みやすい」と答えたそうです。

なお、先生は、その理由をもたずねたそうですが、「漢字の多い文の読みにくい」理由は、「かななら必ず読めるが、漢字には読めない字があるから」と答えたそうです。しかし、これは、読めることと発音できることを混同しているものです。

私が驚いたのは「漢字の多い文の方が読みやすい」という理由に、多くの子どもが、「かなは読めても意味がわからないことが多いが、漢字だとよくわかる」「漢字は一目で意味が読み取れる」という答をしたということです。つまり漢字で表記できる言葉は最初から漢字で表記して学習させても、一年生は困難に思うところか、その方をはるかに多く望んでいるのです。

昨年、私の学級に、一学期を終えても、自分の名に用いられるかなが4字だけしか読めるようにならなかった子どもがいました。ところが、その子どもが、漢字は46字も読めたのです。つまり、そのように能力の低い子どもでも、漢字は文部省の一年間の習得目標を三分一の期間で軽く突破していたわけです。また、同じ一学期間に漢字は79字も読めるようになったのに、かなは9字(そのうち5字はその子の名前前で、幼稚園のときおぼえた)しか読めなかったという子もいました。

興味あることには、これらの子どもたちは、本を読むのに、漢字をたよりにして、読めないかなを適当に判読していることです。初めの例

の「歩け、歩け、元気に歩け」でも、ちゃんと読みますし、「元気」だけ示しても正しく読みますが、「け」や「に」だけを示したのでは、全然読めないのです。つまり、彼らにとっては漢字の方が覚えやすいので、先に漢字を覚え、その読める漢字をたよりに、それらがうまくつながるようにかなを読むことを考え出していたのです。かなのやさしくないことはこれで明瞭だと私は思います。

では、漢字はなぜやさしいのでしょうか。

山	川	月	花
やま	かわ	つき	はな
mountain	river	moon	flower

右の三つの表記を比較してみればすぐ分るように、漢字は一つの言葉が一つの字形にまとめられていますので、物と文字と一対一の関係で対応して、すぐ文字が言葉と密着され固有の印象が形作られやすいのです。

一つの字形が一つの思想を表わすということが、文字としては理想的な姿なのです。だから、外国でも、「\$、£」のような符号や、「U.S.A」とか「P.T.A.」というような略語が多く用いられるようになったのだと思います。

### 文字と思考の問題

私たちは言葉で考えます。その言葉の裏には文字が潜在しています。ですから、私たちが物事を考える場合、文字というものが非常に考え方に影響を及ぼすものです。私たちは、物事を精密に考える場合には、どうしても文字の力を借りるようになります。重大な問題は頭

で考えただけでは明確になりませんので、文章に書いてみる必要があります。

そのために、文字がやさしいかむずかしいかは問題ではなく、たといむずかしくても文字を学習しなければならない、という必要が生じて来るわけです。だから、むずかしい文字は避けて、やさしい文字を取る、という態度は誤っています。私は、国語をすべてかなで表記するようになれば、日本人の思考力が弱くなる、と思っています。

たとえば「さくぶん」とか「ぶんしゅう」という言葉を、かな表記の場合、「さく」と「ぶん」、「ぶん」と「しゅう」に分析することは困難です。従って、「さくぶん」「ぶんしゅう」という言葉の持つ概念も理解しにくく、理解できたとしてもなかなか明確にはなりません。しかし、「作文」「文集」という表記だと、私の一年生が独力でその意味を理解しましたように、理解しやすいばかりでなく、「作」「文」「集」と分析により、概念を明確にすることができます。

「さくぶん」と「ぶんしゅう」のぶんは同じ概念を持つものですが、「はんぶん」となると、同じぶんでも概念が全く違ってしまいます。これでは、子どもたちが言葉を分析したり、概念を明確につかむことはどうしてもできません。この点、「半分」という表記では、明瞭に表記が違ってきますし、「分」は刀で物を二つに切り分けた形を表わしていますので、その言葉の持つ概念を容易に、明瞭に理解することができます。

昨年の9月、「動物」という言葉が提出された時、子どもたちが、「先生、どうぶつって、動く物って読めるね」と言いました。そこで私は、「そうだよ。チューリップの花も桜の木も生き物だけれど、キリンや馬のように動き回ることができないだろ。それで、生き物を、動ける物と動

けない物とに分けて、動き回ることでできる生き物を動物と言うことにしたのさ」と言って聞かせました。すると、これは意外だという顔つきで聞いていた子どもたちは、「じゃあ先生、トンボも動物なの」「先生、金魚は?」「蟻は?」という質問です。「先生、人間も動物?」という質問まで出ました。普通、こういう質問が出るのは四、五年です。しかし、漢字表記によって、一年生でもここまで考えるようになり疑問を持つようになるのです。

### 漢字で思考力を練る

漢字に対する非難は二つあると思います。漢字が国語学習を困難にし、国民の国語生活を不幸にしていると言うのです。これは事実ではありません。たとえばアメリカでは、わが国の二倍以上の時間を国語学習に費していますが、それでも読書力の低いのに頭を悩ましています。フランスでもドイツでもソ連でも、わが国の2倍から3倍もの時間を国語学習に費しています。決してわが国の国語学習は、現在でも困難ではありませんし、漢字をもっと早くから提出するなら、もっとずっとやさしくすることができます。

もう一つの非難は、漢字が機械に使いにくいということです。しかし、タイプは、漢字と性格を異にするローマ字のために、ローマ字を使用している人々が作ったものですから、利用できないのが当然です。欧米に追随している限り止むを得ないことです。しかし、自らの頭を使えば、漢字タイプもファクシミリもできるわけです。タイプのために漢字を廃止せよというのは、帽子のため頭を削るようなものです。本末を誤っています。

私は、しかし、英文タイプやカナタイプも大いに使ってよいと思って

います。それは国字問題とは別に、実用の面だけのことです。なぜなら、私たちは、ローマ字文でもかな文でも、ローマ字やかなを頭の中で漢字に変え、頭の中で漢字混り文にして読んでいるからです。私たちは、ローマ字文やかな文が漢字混り文に翻訳できない時、まごつきますが、漢字に翻訳できる時、それを理解することができるのです。

私は前に述べましたように思考力が低下するという理由で、国字をローマ字やかなに改めることには反対です。

(「文芸春秋」昭和36年12月号)